

## 第1章 受療行動にみる「災厄」の認識と問題の移行

## 1. はじめに

医療人類学は、非西洋の人々が病気の原因を「説明する」のに必要な認知枠組みが2つに大別されることを明らかにした[フォスター & アンダーソン 1987:72-74]。パーソナリスティックな病因論とナチュラリスティックな病因である。パーソナリスティックな病因論とは、超自然的存在、脱魂、霊物の侵入、邪術、妖術、祖霊への儀礼的・倫理的義務の不履行、タブーの侵犯などによって病が引き起こされると信じられている外在的な病因モデルである。一方、ナチュラリスティックな病因論とは、非人格的な体系的用語で説明され、病気を身体中の熱さや冷たさなどの内在的平衡モデルである。

たとえば、インドネシアのジャワ人の病因論は以下の4通りのカテゴリーになっている[Geertz 1960:95-99]。

- (1) 自然的要因として、悪い食物の摂取、多すぎる冷風や熱のような事物の侵入。
- (2) 霊的原因として、悪霊の侵入、魂の喪失、邪術、過去に犯した罪など。
- (3) 情緒的・心理的原因として、怒り、悲しみ、嫉妬、憂鬱、不安、羨望などの強烈な情緒。
- (4) 社会的要因として、老人や両親への不適切な行動、不適切な命名。

バリ人の病因論はジャワ人の冷/熱の観念に似た部分もみられるが、民俗語彙からみると、病は大きく3つに分類されている。「自然による病(cacar alam)」「人による病(peperentahan)」「神霊による病(kesisipan/ susunan)」である。「自然による病」とは、たとえば風邪やマラリヤなど我々が考えるところの「病気」と重なるところが大きく、冷/熱の不均衡による病の場合もこのカテゴリーにはいる。「人による病」とは黒呪術によるものであり、「神霊による病」は宗教的タブーを冒した者や祖霊祭祀を怠った者に対する病とされる<sup>1</sup>。

ただし、人々はある種の治療を受けるときに、これらのカテゴリーのどれかひとつだけに原因を求めるわけではない。診察や治療結果に満足のない人は、自分がかかっている医療を変えて、新たな原因を突き止める行動にでる場合がある。この点で医療人類学は病因を静態的にみることがあり、たとえばフォスターらが、先のパーソナリスティックな病因論を説明するとき、「ギミ族がしかじかの病に陥った場合、その原因は...とされる」といいかたにとどまる。しかし、実際には、バリの人々が医療を利用する場合、ひとつの医療だけではなく、医療の変更や併用が多くみられるのである。

とするならば、それはいったいいかなることを意味しているのか。おそらく人々の医療利用の方法は、病や災厄に対する問題構制の動態を示しているのではないか。そのことを考えるため、本論では、クチョスの家族に起こったさまざまな災厄の事例を紹介し、どのように人々が災厄に対する認識を構築し、対処していくかを、受療行動を中心に分析する<sup>2</sup>。本事例において、中心的なトピックになるのは黒呪術である。おそらく本事例において、個人に降りかかった災厄は、個人的経験やクライアント-治療者間のみに収斂されるのではなく、より広い関係で受けとめられることを示すことができるだろう<sup>3</sup>。

さらに、もう一点、本章では民俗医療の持続についても考えてみたい。というのは、現在、インドネシアにおいては、近代医療にくわえて、民俗医療が数多くの人々にいまだに実質的な医療サービスを提供し続けている。これは、近代医療が整っていない僻地だけの話ではない。近代医療施設が利用できる状況にある地域でさえも、民俗医療は人々にとって重要な位置を占めている。医療人類学は、なぜ近代医療と民俗医療が並行して利用されるのか、なぜ民俗医療の持続が可能なのか、を問うてきた。

たとえば、現代インドネシアの医療状況を考察した研究者として、吉田正紀がいる[吉田 2000]。吉田は、インドネシアにはいまでも慢性病のようなさまざまな肉体的心理的病気や、ストレスのあるライフ・スタイルによって生じた不安が人々の中にみちており、民俗医療者のところにやってくるクライアントの大多数は、近代医療に対して不信感をもっているという。彼らの多くは病気が長引くと、近代医療は不十分と感じ始め、超自然なものなどに原因を求める傾向にあるという。そのような状況で、彼らは民俗治療者を、診察にもっとも適した者とみなすようになるのである。吉田は、病気と治療の文化的モデルは、民俗治療者と彼らの仕事の存続にきわめて深い関係であることを明らかにした<sup>4</sup>。しかしここで、ではなぜクライアントと治療者との間に、文化モデルの共有を可能にする密接な関係が維持できるのかという疑問が残る。

次にも、人々の災厄に対する認識と対処とともに、民俗医療の持続性がいかにして成立するかについて考察する。

## 2. 黒呪術事件の内容と経過

本節では、クチョスなる人物を家長とする家族が遭遇したさまざまな災厄について記述する。災厄に見舞われたとされる人間は8名(男5名、女3名)。図2(省略)は、時系列にそって彼ら被害者の経験を記したものである。横軸は時間の経過、縦軸に引

かれた線は時間の共有、白点は個人的経験、黒点は集団的经验を表している。

今回の黒呪術事件の遠因となる発端は、1994年に第7夫人ルミの長女レンゴが呪術攻撃を受けたとされる出来事である<sup>5</sup>。この事件がことさらに注目されるのは、家族ではじめて憑依を経験した事件であり、その際、父クチョスに対して罵詈雑言を投げつけ、「第8夫人ニラとその仲間の仕業」との発言をしたことにある。これ以前にも「ニラが黒呪術師である」という噂があり<sup>6</sup>、レンゴ自身もそれを聞いていたとはいえ、両者はいたってふつうの間柄だったという。また、屋敷内で彼女が不審な行動をとるところをみたことはなく、噂についても半信半疑だった。だが、この件を境にレンゴはニラと口をきかなくなり、ニラの結婚当初から不仲だった母ルミと同じく、緊張関係に入ることになった。しかし、家族内でニラに対する疑惑は浮上したものの、第7夫人とレンゴをのぞいた家族同士のつきあいに変わりはなかった。それから、約8年の歳月を経て、再びこの家族に黒呪術による災厄が降りかかることになる。

以下、本章ではとくに、一連の事件が問題化する発端となったレイモンド、最も重い病に冒されたチョエ、その他、コソッグ、ブルット、その発言が重要視されるワティの事例<sup>7</sup>と、黒呪術が発覚した後の家族の行動を記述する。事例は、それぞれに対して筆者がおこなったインタビューをもとに再構成しているが、他の被害者の事例も含み込む事例があることを断っておく。

## 2-1. レイモンド

レイモンド(第1夫人長男)の事例からみていこう。彼の職業はフリーランスの観光ドライバーで、主に日本人やオランダ人などのガイドなどをつとめる。複数の外国人顧客を持ち、家族からは裕福と考えられている人物である。彼の身に起こった出来事は、一連の事件の中で比較的早い時期に黒呪術と認定されたものである。

2001年5月夜半、レイモンドは腰に激痛が走り、目を覚ました。はじめは痛みが突発的だったためサソリにでも刺されたのかと疑ったが、そうではなかった。痛みは左腰部か左腹部にわたっており、「ナイフで何度も刺された」ように感じたという。深夜ではあったが、近所に住む看護婦を呼び、痛み止めの注射を打ってもらった。

翌朝、叔父の呪術医であるサル(第1夫人次男)の治療を受け、プマリ(pemari)<sup>8</sup>という病気と診断される。しかし、病状はいっこうに回復をみず、その翌日に祖父クチョス(呪術医)にあらためて診断を受けたところ、黒呪術と判明する。レイモンドは祖父にも処置を受けるが、激痛が引かないため、アムラプーラ(Amulapura:カランガスム県都)にある公立病院に入院した。

病院では疝痛 (kolik) と診断され、注射や点滴等の近代的な治療を受け、病状は快方に向かった。痛みも引いたため、レイモンドは翌朝に退院する。しかし、退院した夜にまたもや病が再発したのである。痛みのためレイモンドは朝まで一睡もできずにいた。苦痛の中、レイモンドはこの病の原因は第 8 夫人ニラの黒呪術ではないかと思ひ、朝になったら彼女を詰問しようと考えた。ニラが黒呪術師であるという噂を聞いており、レイモンドが家を新築してから頻繁に彼女の訪問を受けるようになったからである。夜が明けてレイモンドは母方の従兄弟に送られて、長老クチョスとニラの家に向かったが、結局、ニラを詰問せず、クチョスに病が再発したことを伝えるにとどめて帰宅した。

その日の夕方、さらに Z 村の呪術医の診断を受けた<sup>9</sup>。呪術医の説明によると、レイモンドはサンテ (sante) とよばれる黒呪術を用いられているという<sup>10</sup>。この黒呪術は 5 人の人間によっておこなわれたもので、呪術医はそれぞれの人間の特徴を教えてくれた。呪術医のお告げでは、首領格は「女で家族の一員」であり、「背は少し高い方で、髪は少し縮れている」という。この特徴から、レイモンドはニラにますます疑惑の目を向けることになった。レイモンドは残り 4 人の特徴も尋ねている。呪術医は、首領格の説明と同様に身体的特徴 (年寄りで背が低い)、社会関係 (同じ起源集団)、地理的位置関係 (お前の家の西側に住んでいる男) などの答えを得た。レイモンドは 1 人をのぞいて全員思い当たるという。わからない唯一の人間に関しては、「第 8 夫人の黒呪術の仲間」と考えている<sup>11</sup>。

この後レイモンドは、同じ呪術医に数度の治療を受け回復する。再発防止のため呪術医から言い渡された義務は、呪術医の屋敷寺に半年に一度お祈りをする事、護符 (jimat) を身につける事、牛肉を食べない事である。また彼は、11 月に自宅、翌年 5 月に自家用車に仕掛けられた呪物の探索を、P 村の呪術医サランに依頼している。この呪術医は黒呪術の物的証拠といえる呪物を発見し、レイモンドはその呪術医から魔除けの壺 (penangkal) を 2 つ購入して庭に埋めている<sup>12</sup>。それからは、その壺を埋めたところにも朝夕のお供えを欠かさなくなった。

## 2-2. チョエ

チョエ (第 1 夫人長男の次男) は、兄レイモンドと同じくフリーランスの観光ドライバーであり、外国人の馴染み客を複数持つ。これらの顧客の中に、とくに外国人のパトロンがいることで、彼もまた家族や付近の人間からは裕福と考えられている。近在の観光地チャンディ・ダサ (Candi Dasa) 近くの K 村 (公営住宅で通称 BTN) に妻と 2 人で住

んでいるが、戸籍および住民登録は出身村であるX村にしている。X村の儀礼や共同作業などには、その成員として参加している。

2001年12月にチョエは、頭痛・腹痛・発熱、そして妙に髪の毛が油っぽいといった症状が現れた。自分では単なる風邪と考え、市販薬を買って服用していたが、その症状は長引いた。同じ時期、妻の父が不吉な夢をみた。夢の中で、とても大きなカラスが家の木に舞い降り、気味悪く思った義父が鉄砲で撃とうとすると、カラスは風とともに消え去ったという。その瞬間、現実には家の側で何か大きなものが落ちる音がしたという。義父はこの夢が気にかかり、自分の妻を伴ってY村に住む高名な呪術医のもとを訪ね、呪術医に夢のことを語った。呪術医は、「カラスは黒呪術師であり、家族を病にしている」と解説した。さらに病気になっている家族の症状、頭痛、腹痛、発熱、油っぽい髪などを述べた。そこで、義父は娘婿のチョエのことに思い当たった。彼は呪術医から当座の薬を受け取り、チョエに渡した。チョエの病気はしばらくすると快復した。

翌2002年2月2日にチョエは高熱をだす。体が非常に寒く感じ、眠ることができなかった。まずマラリアに罹ったと考え、医者（この時チョエは義父宅で療養していた）に呼んで血液検査をしたが、マラリアという結果はでなかった。しかし、医者はまだ判定ができる日数以前の病状と考え、マラリアの薬を与えた。病状はすぐに快復し、翌日には自宅に戻っていた。だがそこには、自分の家でありながら、以前のように過ごしやすい雰囲気ではなくなっているように感じた。夜は寝苦しく、普段は吠えない飼犬が天井に向い吠え続け、後に天井から人が走るような音が聞こえてきたという。彼はネズミだろうと思ったが、それでも不気味に感じた。2月5日、Y村の呪術医に再び薬を受け取りに行く。この頃はまだ体に気怠さが残っていたが、呪薬を飲むと、すぐに日常生活ができるようになった。

3月2日からチョエは再び高熱を患った。この時からチョエは黒呪術と一進一退の攻防を続けることになる。病状などの詳しい経過は省略するが、チョエが筆者に自分が黒呪術の攻撃を受けたことを説明する語りの内容は多岐にわたった。まず呪術医の発言をとりあげれば、Z村の呪術医は「黒呪術師は女1人男2人で、おまえたちの住むX村の人間である」といい、P村の呪術医サランは「黒呪術師は女で、家族の関係にある」といったという。チョエは特に自宅から呪物を探し出したP村の呪術医を信望するようになる<sup>13</sup>。

またチョエは、家族の成員が経験したことも交えて自分の病を語った。姪（レイモンドの長女）は、歯が全部抜ける夢（歯が抜ける夢は、バリでは一般的に肉親の不幸を予兆するといわれている）をみた。兄レイモンドは風呂場にムカデが出現した夢を見、

妻エリは誰かと結婚指輪を取り合う夢をみた。チョエは、これらの夢が自分のことを示していると解釈し、また夢を見た当人たちも、これらがチョエのことを表しているのではないかと考えた。その他、不審な物音、妻が大きな白黒の斑犬ににらまれ吠えられたなど、不吉なものを示唆する多くの出来事を語った。さらにチョエは、養生中は自宅ではなく、兄レイモンドの家に世話になっていた。レイモンドは弟のこの状況を怒り悲しみ、自分の場合と同様、に第8夫人ニラの仕業によると考えた。チョエも兄の意見に同意し、状況証拠から自分の病はニラがなしたものと考えようになった。

### 2-3. コソグ

コソグは、第一夫人長男の次男、家族のなかでは数少ない定職の持ち主である。現在、X村近くの観光地チャンディ・ダサ(前出)にある韓国人経営のホテルで、従業員として働いている。

2002年3月30日のことである。夜7時頃、夜の帳が降り始める。コソグは、ホテルの事務所裏で友人と談笑したあと、休憩のためコーヒーを飲もうとホテルのレストランに向かったが、レストランには社長がいたのでその場は引き上げ、レストランの傍らで他の従業員と話をしていた。その後、プール横の暗がりを通ったとき、なにか人の気配を感じた。彼は、気配のする方に呼ばれているような気がして、そちらに近づいた。しかし、その方向は海に面しており、実際には道はないのだが、彼は吸い寄せられるように足を向けてしまったのである。すると何者かが自分の体を押したような気がして、コソグは2mくらいの崖下に尻餅をつくような格好で落下した。海は潮が引いていたが、落下地点はさいわい岩のない砂地だった。立ち上がることはことはできなかったが、這い蹲りながら自力でホテルのレストランのキッチンに助けを求めた。人の少ない夜だったため、なかなか同僚たちは気づいてはくれなかった。やっこのことで、彼はアムラプーラにある公立病院へかつぎ込まれた。病院で診断を受けたが、骨に異常がないとのことで、腰に痛み止めの注射をうって、家に戻った。

10時頃、コソグは、何人かの友人に付き添われて帰宅した。家族は、接骨医(Tukang Urut)であるチャングを呼び、コソグに1時間ないし1時間半治療(マッサージ)を受けさせた。この治療で、彼の痛みは少し回復した。

翌日、ワティに祖霊が憑依した。「コソグをこのような目に遭わせたのは、黒呪術のなせる業だ。呪いの力を使って彼を海に引っ張ったのだ。だが、祖霊が彼を守護したおかげで、運良く砂地に落ちたのだ」と告げた。夕刻4時頃、母が供え物をつくり、家族が落下現場に向かった。コソグの叔父にあたるサルと父母、サルの次男の4人

である。サルは供物を落下地点におき、大地を3度叩き、「コソッグを連れていかないで下さい。帰して下さい」と声に出して祈った。これは、事故を起こしたときに行うバリ人の儀礼であり、毎日同時刻に同所で3日間続けておこなわれた。

コソッグは3日に1度、15日間にわたってマッサージによる治療を受けた。その後、体調はよくなり、なんとか一人で歩けるようになった。そろそろ仕事に復帰しようかと考えていたある日、午後3時半ぐらいに、足に痛みを感じた。右足の甲から足首にかけて腫れ上がり、足の甲から足の裏にかけて刺すような痛みに見舞われた。コソッグは痛みのため再び歩けなくなり、何も手がつかないような状態になった。同居している父が心配し、コソッグをバイクでP村の呪術医サランのもとに連れていった。母は乗り合いバスに乗ってついてきた。サランは足の指を掴みながら診断した。彼の症状は、呪物を踏んでしまったことによって起こった病気だと判じた。コソッグは薬水を3度飲み、足の裏を11本の線香でいぶす治療を受けた。彼はマントラを唱えた線香をもらって家に帰り、6時半頃にまたその線香を使って足の裏をいぶした。足首が硬直し、痛みで足首を曲げることも、地に足を下ろすこともできない状態だったが、線香の燻蒸治療のあと、足首は動くようになった。翌朝6時に起床してすぐ線香で再び足の裏をいぶした。痛みは残っていたが、その日のうちに歩けるまでに回復した。それから彼は3日に1度、P村に行くようになり、そこで1度に3回水浴をして身を清める義務を課された。

コソッグは自分の身に起こったことに関して、事故当時は体調もいつも通りの調子であり、とくに悪いとは思わなかった。職場の崖から落下したことに関して、普段から歩き慣れた場所であることもあり、間違っても崖から落ちることがあるはずがないと考えていた。それは、すなわち黒呪術の仕業だと断定したのである。

#### 2-4. ブレット

ブレットは、調査時、デンパサールにある観光専門学校に通っており、実家を離れ、一人暮らしをしている第7夫人ルミの長男である。

3月3日、ブレットは、実家の屋敷寺(sanggah)でおこなわれる、オダラン・プラ・クンバラ(odarang pura kenbara)の儀礼に参加するため、帰省していた。翌日に授業があったため、この日の夕方6時に下宿のあるデンパサールに戻ることにした。体の調子はよかったし、特になにも問題はなかった。ただ父クチョスが出発するときに「嫌な感じがするから、今日は帰るな」と忠告した。少々気にはなったが、翌日の早朝には授業が控えていたこと、そしてすでに友人と一緒にデンパサールへ帰る約束もして



いた。通常、実家からデンパサールに帰るとき、暗くなる前に到着できるように午後2時か3時に出発するようにしていた。しかし、その日は友人もいっしょに戻るようになっていたので、大丈夫だろうと考えた。ブルットと友人は、バイクの二人乗りをしてデンパサールに向かった。

C村の手前2キロのところにあるA村で、彼は不思議な現象を目撃した。黒い物体が、ブルットの右後方から前方へと通り過ぎたのである。それは大きく背が高いものだったので、人が飛んできたかと思った。しかし、黒い物体はブルットの目前を通り過ぎた途端、消えてしまった。友人に確認すると、彼はなにも見ておらず、気のせいではないかといわれてしまう。その時、ブルットは驚きはしたが、とくに恐怖は感じなかったという。こうして2人は、そのまま道を進んだ。

ブルットはC村に入るあたりで、急に腹痛が襲われた。最初、催したかと考え、バイクをいったん止め、用を足すための場所を探した。だが、便ではなかった。腹痛に耐えて再び運転したが、やはり痛みに耐えきれずスピードを落としたため、後続車に少し渋滞を起こしてしまった。しかし、ついに痛みに耐えきれず、倒れてしまった。友人に支えられながら、薬屋を探し、腹痛の薬(promagという市販薬)を買い求め、その場で水をもらって服用した。これで腹痛が収まると思ったが、いっこうに回復の兆しがみえない。痛みの感覚は、内臓が全部胸元までせり上がったような感じだった。

薬屋の隣人の厚意で、その家で横にならせてもらった。さらに医者を探してもらったが、当日は日曜日のため医者は見つからなかった。友人にレイモンド宅に電話をかけてもらい、誰か家族に来てもらうことになった。C村まで迎えに来てくれたのは母レミ、長姉レンゴ、異母兄サル、そしてレイモンドであった。

ブルットはK村の民家で横になったあと、意識不明になって泡を吹いていたという。家族が車で迎えに来て、サルの家に運び込まれた。折しも、サルの家では儀礼をおこなっており、来客がたくさんいた。サルの治療を受けたが、その時、レンゴが悪霊に取り憑かれ、突然泣き出した。たまたま家を訪れていたサルの友人の呪術医スダルマもブルットを診断し、症状からロンボク・イスラムの呪術が使用されたことを看破した。彼はイスラム呪術に対する治療法も心得ており、この症状に対する有効な薬油をわざわざ取りに行ってくれた。

ブルットは、薬油を頭髮から足の先まで塗られた。スダルマは痛みの中心が頭にあると考え、頭から指圧を始めた。すると、痛みは体中を逃げ回るように移動していった。1時間ほど治療を受けた後、ブルットは快復した。この時クチョスもサルの家を訪れ、ブルットのために薬をつくったのだが、サルはクチョスの薬を飲ませるふりだけして、

捨ててしまった。クチョスの呪力は衰えており効果がなく、それどころかクチョスがニラに操られており、ブルットに害をなす可能性があると考えたからであった。

快復したあと、ブルットは「あの婆(第8夫人ニラ)、殺してやる！！」と叫び、勢いづいてニラのところに殴り込もうとした。儀礼の時にニラが料理した鶏を食べるようにと、執拗に勧めたからである。彼は「ニラが黒呪術師である」という噂も知っており、次姉ワティがニラによって病気にさせられたという話も家族から聞いていたので、ニラの手料理を食べることを避けようとした。彼は断り続けたのだが、ニラは無理にそれらを食べさせようと迫ってきた。鶏を入れていたボールの下から手を差し出してブルットの右手を掴み、揉むような動作をした。気味悪く感じたが、なんとか断ることができた。しかし、ブルットは、ニラに手を触れられたことが、病気の原因だと確信していた。

ブルットが、ニラを黒呪術師と考える根拠は、単に家族からの話だけで判断しているのではなかった。というのは、父クチョスや兄サルのような強力な呪術医に護られている家族に対して、呪的な攻撃をくわえることができる人間はそうはいない。しかし、家族内に敵がいるなら別だ。ブルットは自分を含めた家族に呪いをかけているのは、このような理由でニラと考えた。しかし、クチョスはニラを信じ切っており、自分たちのいうことを信じなかった。ブルットが考えるところでは、ニラは家族をすべて殺したいと考えているに違いない。彼は、ニラが家族の中で唯一の存在になりたいのだと考えているのだと推測する。

この事件のあとにも、ブルットには奇妙な出来事がおこった。夜中、デンパサールのアパートにいるとき、誰かがいる気配がした。ベッドで横になっていたが、誰もいないのに顔をなでられたような感じがしたのである。のちにサリにこの件を話してみると、それはニラが魂を飛ばして様子を見に来たのではないかということだった。熟達した黒呪術師はそういうこともできるらしい。黒呪術のレベルは最高 11 段階あり、普通のカスタの人間(スードラのこと: 平民階級)だと6段階目を最高とされるが、ニラはその段階まで進んでいるとサリから教えられた。

子供の頃、ブルットとニラの関係は良好だったという。まるで実子のようにかわいがってもらった。彼は小遣いを与えられ、お菓子や料理もよくご馳走になった。しかし、ワティの件があってから、話はしないようにしていた。ワティに祖霊が憑依したとき、黒呪術を使った犯人がニラであることを告げ、ニラに対して警戒心を抱くようになった。ブルットは姉の言葉を信じたのである。

それまでブルットはニラとの仲がよいため、母や姉たちからよく思われていなかった。彼女たちから「ニラは黒呪術師だ」とずっといわれ続けてきたが、同じ家族というこ

ともあり、自分に対してはよい人間だと考えていた。よしんば黒呪術を使うにしても、自分に使うなど考えもしなかった。

今では、ニラのブルットに対する態度は明らかに以前と違うようになったという。たとえばブルットが家に顔を出すと、ニラは恥ずかしそうなようすで、家の奥に隠れてしまうようになった。また、以前ニラは、昼に買い物に出かけていたが、最近は人目をはばかるように早朝に買い物に行くようになった。それは、ニラ自身、自分が黒呪術師であることが家族や近所の人たちに露見したことに気づいたことを示しているのだ。ブルットはそう考えている。

以前、ブルットは、異母姉ウィルス(ニラの一人娘)と非常に仲がよかった。まるで同じ母から生まれた姉のように慕っていたが、事件があってから口をきかなくなってしまった。ブルットは、彼女自身もきっと自分の母親がそういうことをしているって知ってるはずだと思っていた。さらに、彼女も恥ずかしいはずだと考えている。彼女は以前ならばしばしば実家に帰ってきたが、いまは全然帰ってこなくなったからである。ブルットは、ウィルスを美人で奨学金を得て大学に行くほど優秀な女性であると評価していた。それだけに、母親が黒呪術師であることを残念に思い、ウィルスに対して同情心をもっていた。

## 2-5. ドベル

ドベルは、第1夫人三男の長男で、現在はX村にあるコテージの庭師として働いている。もともとは恰幅のよい体型だったが、数年前のある事件をきっかけに体調を崩し、痩せてしまったという。その事件とは黒呪術に起因するものであると考えられている。本事例とは直接関係がないが、まずその話を記しておきたい。

最初にドベルが黒呪術を経験したのは、デンパサルで個人住宅の建築現場の働いていた時のことだった。大工ではなく、資材を運んだり、セメントをこねたりするような雑用だった。月までは覚えていないが、おそらく2000年頃だったという。工事の注文主は外国人妻になっているダユという37歳の女性だった。彼女の夫は西洋人で、その時は帰国していたらしく、家にはいなかった。ダユは家を造る人手が足りないので人手を募集したのだった。この募集に、ランガスムのX村から何人かが応募し、ドベルもそのひとりとなった。

その日、朝方に何人かでダユの家を訪れた。ドベルは、家に入ったとき、入り口すぐの土間に線香がたくさんささっていたのに気づいた。「側にお供えもなく、いったい何だろう、何の意味があるんだろう」と思いつつ、その線香をなんの気なしに踏みつけ、

火を消した。と、その瞬間、足がくすぐたくなり、ほんの少しだけ痛みを感じた。痛みは気に留めるほどではなかったので、そのまま仕事を始めた。それから4、5日ほどそこで仕事をしたが、ずっと気分は優れなかった。仕事時間は7時から12時、1時間休みを挟んで5時までであったが、ごく普通のペースで、とくに過酷な労働というわけではなかった。仕事の期間中は近所のアパートに泊まった。アパートでは仲間たちと、よくダユのことを噂していた。そんなある日、雇い主であるダユが「アパートで私のことを噂していたでしょう」といい、「私はあなた達のいるアパートをよくのぞきにいく。といっても、体は寝たままで魂だけがそこに行くのだけれどね」といった。

ドベルはダユの言葉を聞いて、黒呪術師は髪が地面につくほど長いという、世にいわれる黒呪術師の特徴が彼女にあてはまることに気づき、恐怖を感じた。作業者としてきていた者たちの中にはキリスト教の聖職者(カトリックかプロテスタントかは不明)もいた。彼はキリスト教聖職者でありながら、バリの黒呪術に詳しい。彼によれば、ダユは数え切れないほどの護符を身につけており、その霊的圧迫感が強すぎて怒りっぽくなっているという。黒呪術師は、修行や身につけている呪法の道具のストレスによって短気になる。彼はそう教えてくれた。

仕事を終えてX村に戻っても、ドベルはなお気分が悪く、足に痛みが残った。デンパサールからずっと続いている不快感であった。とりあえず呪術医である叔父のサルのところに行って治療を受けた。デンパサールで妖しげな線香を踏み、足が痛み気分が悪くなったと症状を述べた。ドベルは脈診を受け、薬水を飲まされ、洗顔をさせられた。サルは症状や原因についてとくに何もいわなかった。治療を受けた直後は治ったような気がしたが、実際のところ気分は優れず足の痛みもあった。しかし、我慢できないほどではなかったので、仕事を続けた。彼は、当時若かったので、その苦痛に耐えて仕事のできたのだと考えている。治療より仕事が先だと思っていたし、家庭の事情が彼に休養をとらせなかった。

その時から始まった身体の不調は、おそらく線香を踏みつけたのが原因で、ダユの仕業とドベルは思っている。デンパサールで働いていた頃は、黒呪術が原因とは考えなかった。というのは、ドベルとダユの間には別段なんの問題も存在しなかったからである。ドベルは、線香を立てていたのは、当時ダユが誰かに対して黒呪術攻撃をおこなっている最中で、ドベルが線香を踏んだことで誰かの代わりに病になったのだと推測した。以来、自分の考えていることがあちこちに飛ぶようになり、まとまりがつかずよく混乱するようになった。以前は、よく太っており健啖だったが、いまでは食が細くなり、ひどく痩せてしまった。当時は、仕事について考えることはあったが、仕事はい

つでも見つかったし、とくに悩みというほどのものはなかった。ゆえに、彼は、心身が不調である原因をダユに受けた黒呪術と思うようになったのである。こうしてドベルは、第 8 夫人ニラが家族に黒呪術を用いる以前から、黒呪術の脅威を経験した「哀れな被害者」として、家族からみなされるようになったのである。

では、ドベルは家族内に起こった「事件」にどう関わったのか。

「事件」が起こったのは、2001 年 12 月頃のことだった。ドベルは、以前からさまざまな雑用を頼まれて、祖父クチョスの家によくいていた。たとえばランプを取り替えたり、壊れた家具をなおしたりなど、他愛もない仕事をするためである。ドベルがクチョス家で仕事をすると、ニラから飲み物や食べ物を勧められたが、彼女が黒呪術師だということを父から耳にしていたので、ずっと遠慮していた。彼は、ニラがすすめるものに対して以前から警戒していたのだ。しかし、この日、ドベルはニラにほとんど強制的にコーヒーをを飲まされたのだという。目の前にクチョスがいたので、断るのは失礼にあたりと考えたのだった。本当のところをいえば、そんな危険なものを飲みたくはなかったし、できれば捨てたいくらいだと思っていた。だが、飲んだコーヒーの味は、なんの変哲もない普通の味だった。

それからおよそ1月ほど経って、ドベルは右の前歯に痛みを覚え、ぐらぐらと動くようになった。さらに左の奥歯にも痛みを感じるようになった。彼はそれまで、虫歯の経験をしたことはなかった。そこで P 村にある診療所 (peskesmas) に行き、痛み止めの薬をもらったが、効き目がまったくなかった。2 日ほどすると、今度は上唇と鼻の下が腫れ上がった。その後、サルの家に行き、治療を受けた。病状の説明をし、脈診を取ってもらって薬油を服用した。すぐには効き目はなかったが、3 日ほどで、痛みと腫れは退いていた。この時は、原因を黒呪術にあるとは考えなかった。

だが、しばらく経つと、ワティに霊が憑依して、ドベルの病の原因を語ってくれたのだという。この時、憑依していたのはニラの生き霊で、彼女は「家族に病気を起こしているのは全部私だ！！」と話し、そしてワティのそばにいたレイモンドの方を向き、レイモンドとドベルの病は自分がやったことだと暴露したのである。また、ドベルにかけた黒呪術は以前彼が飲んだコーヒーに仕掛けたとも語った。そのあと、レイモンドがドベルのもとを訪れ、ことの真偽を尋ねた。ドベルはワティの語りに同意した。

ドベルは、祖父の家で失敗や間違いもなく仕事を続け、しかも報酬を求めたことはなかったのに、ひどい目にあったと考えている。今では、ニラはドベルと話すと、とても恥ずかしそうにするようになった。祖父クチョスもなぜか恥ずかしそうにしている。おそらくニラは、自分がおこなった悪事がばれたことを自覚しているのだろうと、ドベル

は考えている。

以上のような個人的にさまざまな黒呪術の攻撃を受けた証拠とされる事象は、あくまでも黒呪術の存在の示唆に留まるものにすぎない。彼らは黒呪術師の噂を持つニラに対して疑惑を抱いたが、最初の段階では、問題が家族全体に波及することはなく、まだ個人的な問題に留まっていた。しかしながら、他方で黒呪術を用いて災厄を起こしているのは第8夫人であると直載に発言する人物が登場し、家族の認識は同じくするようになる。その人物こそ、第7夫人の次女ワティである。彼女の発言は、「被害者たち」の病状と合わせることで家族にとって信憑性を持つにいたる。なぜか、つぎにワティの発言に耳を傾けたい。

## 2-6. コマン・ワティ

ワティは第7夫人の次女であり、当時は村のコテージで掃除婦として働いていた。口数は少なく、おとなしい印象を受ける女性である。彼女が自分の病を自覚したのは2001年5月頃で、腹痛や吐き気、胸焼けなどであった。病院には行かず、兄のサル(第1夫人の次男)の治療を受け、病は黒呪術によるものと診断された。ブバイ(bebai)という精霊の仕業として、何度も治療を受け、快復したり再発したりの繰り返しだった。このとき、ワティはクチョスの治療を拒否し、サルに治療を任せていたのである。

2002年2月20日、突然ワティに憑依現象が起こる(bencarian)<sup>14</sup>。彼女は悪霊(彼らの説明では黒呪術師の生き霊)に取り憑かれ、家族に対して罵詈雑言を吐きちらし、「ワティをこのような目に遭わせたのは私(第8夫人ニラ)だ!」「10人で呪いをかけた」などと述べ、1994年のときの長女レンゴと同様に、第8夫人による黒呪術攻撃の存在を明らかにしたのである。

この日を契機に、ワティの憑依現象は頻繁に現れるようになった。彼女に憑依する霊は、悪霊だけではなく祖霊の場合もある。祖霊の場合は家族に忠告や助言を与えるが、時に発言が混濁し、祖霊なのか悪霊か判断がつかない場合がある。このような場合、サルがワティの発言を選択し、解釈する役目をになった。彼女は自分についてのことだけではなく、他の家族の病についても言及するようになる。前述したレイモンドとチョエはもとより、ワティの憑依以前に第8夫人の差し出すコーヒーを飲んで歯が欠けたというドベル(第1夫人三男の長男)、歩き慣れた職場の崖から落下して怪我を負ったコソッグ(第1夫人長男の次男)、彼女と同腹の弟ブルットの失神、さらには自覚

症状のない人間のことで語った。悪霊の「暴露」と祖霊の「忠告」、これらにより家族のニラへの疑惑は確信に変わっていった。

そして4月16日、サルの次女ジェロスリもまた憑依現象を経験することになる。ただし、彼女の場合はワティと異なり、祖霊神のみが彼女の中に入ってくる。また、それをある程度、意志的にコントロールできるという。つまり、黒呪術によって悪霊が憑依するわけではない。彼女もまた、時期的にはすでにワティの発言の後追いのようになってはいるが、家族の病の原因について言及し、それがニラの仕業であることを告げた。そして祖霊からの助言を家族に与えるだけでなく、祖霊神の命により、家族全員に対して治療もおこなったのである。

ワティとジェロスリの憑依は、家族へもたらされた脅威を説明するのに十分な説得力を有していた。こうして家族の黒呪術に対する確信は広まり、人々は盛んにこのことについて語り合うようになる。しかし、黒呪術に関する話題はあくまで家族内にとどまっていた。家族以外の人間に第8夫人ニラが黒呪術師であると漏れることは、すなわち「家族の恥」をさらすことになるからである。加えて、長老クチョスは高名な呪術医であり、その妻が黒呪術師として家族に黒呪術の猛威を振うというのは、彼の職業上の不名誉なことである。家族はそう考えていたのである。

しかしながら、ニラが「黒呪術師」として意味づけられ、その確信が家族集団内に蔓延するにあたって、ワティの発言だけがとりわけ重要視されたわけではない。後に詳述するように、そこには家族の外部からの権威として占いが導入された。それは、隣村P村に住むトゥカン・トゥヌン<sup>15</sup> (tukang tenung: 以下トゥヌンと略す) と呼ばれる女性占い師である。ここでトゥヌンの説明をしておく。トゥヌンはいわゆる巫師であり、依頼者の祖霊もしくは祖霊神を自らに憑依させ、依頼者の質問に答え、また霊の意志を伝える。ここでとりあげるトゥヌンの言を借りれば、「祈り」によって依頼者の祖霊もしくはトゥヌン自身の守護霊を呼び出すことができ、その霊が自分の口を通して語るといふ。ただし巫師によっては、呼び出す霊が決まっている。バリの人々がトゥヌンは様々な占い師の中でも特殊な才能の持ち主であり、性行為の禁止や祈りの義務など神から受ける制約が極端に厳しいと考えている。トゥヌンが語る災厄の原因は大別すると以下の二つになる。

- 1, 黒呪術。病気、事故、家庭や人間関係の不和をおこすとされる。
- 2, 先祖霊の供養不足。浄化儀礼を繰り返して、最後に先祖霊は祖霊神へと神上がりするが、長い間供養されずに放置された霊は子孫を護る力が弱まり、黒呪術を受けやすくなるという<sup>16</sup>。

ワティの憑依がはじまった直後、このトゥヌンのもとに積極的に通う人物が現れる。ワティの母である第7夫人ルミである。

## 2-7. 黒呪術発覚後の家族の行動

ワティの憑依現象が現れた後、ルミはこの問題に関し、3度にわたって隣村P村に住むトゥヌンのもとを訪れている。1度目の時、彼女は次女の病の原因とその対処法をトゥヌンに尋ねたところ、トゥヌンは「原因は、男女の2人組が黒呪術を使ったことにある。そしてその人物は家族の者である」と答えた。トゥヌンは黒呪術師の特徴についてこれ以上明言しなかったが、ワティの憑依時の発言もあいまって、ルミをはじめとした家族は、ニラが黒呪術師であることを確信するようになった。加えてトゥヌンは、黒呪術云々よりも重要なお告げをする。すなわち「黒呪術をうける根本的原因は、先祖の神上がり儀礼(nuntun)を済ませていないことにあり、そのために先祖は子孫を護ることができなくなった」と、神上がり儀礼の必要性を説いたのである<sup>17</sup>。そこで、第7夫人は家族にこのお告げの内容を伝え、家族は神上がり儀礼の実現に向けて頻繁に家族会議を開くようになったのである<sup>18</sup>。

ここで注目すべきは、この知らせを受けた後、それを契機とするかのように、ワティの発言も、ニラの黒呪術についてだけでなく、先祖霊が取り憑き「神上がり儀礼をしてほしい」という語りとして現れるようになった点である。こうした一致により、さらにトゥヌンの言葉の正当性が家族内で強まる。と同時に、黒呪術対策と莫大な費用がかかる神上がり儀礼の実現を議題とする家族会議が開かれるようになるのである。

トゥヌンへの2度目の訪問(4月15日頃)では、ルミはワティの快復具合について質問している。そこで完治したとお告げをもらったが、あらためて祖霊の供養を早く行うように告げられる。4月26日、黒呪術の攻撃の穢れを祓うために<sup>19</sup>、隣県クルンクンにある起源集団パセック・ゲルゲル(Pasek Gelgel)にある三つの起源寺<sup>20</sup>(Pura Susunan Pasek Gelgel Pura Puseh Pasek Gelgel Pura Dasar Pasek Gelgel)の3つの寺院を順に参詣)において、初めて家族がすべて参加した浄化儀礼(melukat)が開催された。そのおよそ1ヶ月後の5月25日には、神上がり儀礼の前段階にあたり、一族寺(pura ibu)に家系図を奉納するプラタスティ儀礼(pratasti)が行われた。ここで興味深いのは、家族に黒呪術の穢れをもたらした張本人とされるニラも参加している点である。

5月29日の3度目のトゥヌンへの訪問は、前日の神上がり儀礼の準備段階である儀礼の首尾を尋ねるものであった。首尾は上々であるとの答えをもらったが、あらため



て神上がり儀礼の重要性を説かれことになる。すでにこの家族は神上がり儀礼に向けて準備に怠りなかったが、これらの儀礼を行う上である重要な案件が浮上する。一族分裂の危機である。家族儀礼の際に使用する一族寺は、もう一つのエンデを家長とする家族と共有している。クチョスとエンデの家族との間に血縁関係はないが、クチョスの家族と起源集団を同じくすると考えられており、一族寺を建立する際、共同出資した集団である。2つの集団はこれ以前にも、共同で一族儀礼を行う機会が少なくなかった。ところが、彼らは、クチョスの家族が出自と考える起源集団パセック・ゲルゲルに対する帰属を拒んだのである。もともとはこれら両家族を含めた一族は、自らの起源集団を明確には規定しておらず、2つの起源集団の候補をもっていた。もうひとつはプラサリ(Pulasari)という起源集団である。クチョスの家族はすでにトゥヌンから自分たちの起源集団がパセック・ゲルゲルであることを聞いていたが、もう一つの家族はプラサリが自分たちの起源集団であることを信じ、クチョスの家族の意見に従わなかった。その結果、この家族は起源寺で行われた浄化儀礼と一族寺で行われた儀礼をボイコットしたのである。トゥヌンからのアドバイスでは、神上がり儀礼では一族の成員すべてが参加しなければならないという条件が付けられた。それゆえ家族会議では、エンデの家族の説得が主たる議題になった<sup>21</sup>。この時点で、クチョスの家族の問題の焦点は、黒呪術の問題から神上がり儀礼の遂行における諸課題へと完全に移行したのである。

### 3. 考察 -黒呪術をめぐる経験の伝達と解釈が共有される過程-

#### 3-1. 個人から集団への主題の移行

表1

	問題の移行	人間関係の変化
ワティ	A B C	×
レイモンド	A B C	×
コソッグ	B C	×
チョエ	A B C	×
ブルット	B C	×
ドベル	A B C	×
レンゴ	B C	× ×
ジェロスリ	B C	×

前節をふまえて、被害者とされる人々の災厄に対する説明の変化と第8夫人ニラとの関係を表にする(表1)。表1- は災厄への対処の理由づけの推移である。前述した出来事の流れから、災厄への対処は以下の3つの段階に分かれると考えられる。Aは災厄を単なる病や事故などの「自然現象」ととらえる段階、Bは災厄の原因を「黒呪術」としてとらえる段階、Cは黒呪術を含めた災厄を「祖霊祭祀の未遂行」に起因するものとする段階を示す。時系列的に見ると、次々と重要な情報が開示されていることがわかる。

まず、 から、自然現象から黒呪術 祖霊祭祀の未遂行という流れ、もしくは黒呪術 祖霊の零落のパターンになっている。黒呪術を災厄の原因とする段階では、ワティの憑依以後、ニラの黒呪術師疑惑は確信にかわり、家族を混乱に導くことになるが、個々人は「黒呪術」に対してのみ対処していた。しかし、トゥヌンの「儀礼の未遂行」というお告げを得て、またその後ワティがそれを裏付ける発言をすることで、問題が「祖霊祭祀」へと移行していく過程が看取できるだろう。

また、もう一度図2に注目してみると、被害者とされた人々の共通経験として、起源寺での浄化儀礼と家系図を一族寺に奉納するプラタスティ儀礼には、黒呪術の「被害者」だけではなく、ニラも含めた家族の成員全てが参加していることがわかる。主題が「黒呪術への対処」から「祖霊祭祀」に質的に転化する。それは個別間の問題から家族集団の問題へと進級することを意味する。家族会議における問題の中心は、「第8夫人ニラの黒呪術」から「一族寺を共有する一族(彼らは起源集団をブラサリと考えている)の説得」に変わってしまったのである。

次に表1- は、ニラと被害者の黒呪術事件以前・以後の関係の移行を示すものである。表中、 は良好、 は普通、×は不良を意味する。もちろん人間関係をこのような紋切り型で示すのは不適切であるかもしれないが、インタビューをもとに「関係は良好だった」と答えた人間には 、ニラが黒呪術師だという噂は聞いていたが、家族つき合いはしていたという答えには 、関係が悪くなったという答えには×を便宜的に使用している。

では、黒呪術事件を境にニラと被害者とされる人々の関係が全て悪化していることがわかる。被害者とされる人々に、なぜニラに狙われたのかという理由を問うと、経済的な嫉妬、あるいは彼女が無差別に悪をなす存在といった答えがよく聞かれた。これらの語りから読みとれるように、ニラは「絶対的な悪」としてイメージされている。ここで指摘できるのは、黒呪術が持ち出されることによって、被害者とされる人々の怒りや憎悪といった情動のベクトルが同じ方向を向いたことに他ならない。それは、とりも

なおさず集团的情動を画一化することになったのである。そして情動の画一化は、後々まで集団の意見・行動を統一するにあたって有意性をもつことになるのである。

しかしながら、ここで強調したいのは、人々はネガティブな感情を持ちながらも、ニラを完全には排除しない、ということである。たしかに人々の間に「ニラは黒呪術師である」という認識が広がるにつれ、彼女は孤立していく。しかし祖霊祭祀の案件が浮上すると、彼らの問題の対処に関する語りは「儀礼が施されたら、先祖の家族を守護する力が強まり、黒呪術による攻撃を避けることができる」が主流となり、「儀礼が終わればニラの呪術は無力化される」というふうに語られるようになったのである。また先にみたように、ニラは疎まれ忌避されながらも、一族寺や起源寺での儀礼の参加を許されている。ニラはこの一連の事件により「黒呪術師」の役割を担わされることになってしまったが、出来事の主題が拡大したことで、黒呪術師としての彼女のイメージはそれ以上肥大化することなく、また完全なる外部へ排除されることなく周縁に留まることになったのである。

### 3-2 . 災厄の内容と対処法

「被害者」とされる8名をめぐる一連の事件の期間は、第7夫人の長女レンゴが1994年に単発的に被害を受けたとされることを別にすると、2001年5月から2002年4月下旬に集中している。では、個々人が被ったとされる「災厄」とその対応および根拠づけについて整理してみよう(表2)。それぞれの項目の内容は以下のようになる。

災厄の内容: a.病・けが、b.事故、c.憑依現象、d.人間関係の不和、  
e.経済問題

現実的対応: A.呪術医、B.近代医、C.トゥヌン、D.伝統的接骨医、  
E.自己治療

原因を黒呪術とする根拠: .呪術医、 .トゥヌン、  
.家族、もしくは自身の憑依時の発言、  
.不審事

表2

	災厄の内容	現実的対応	黒呪術を原因とする根拠
ワティ	a,c,d	A,C	・

レイモンド	a,e	B A	・ ( )
コソッグ	b a	B A,D	( )
チョエ	a,d,e	B A	・ ( )
ブルット	b a	A	( )・
ドベル	a	B A	( )
レンゴ	a,c	A,C	( )
ジェロスリ	a	A,E	( )

の項から、実にさまざまな種類の不幸が「災厄」に含まれていることが示される。これらの災厄は、筆者が「どのような被害にあったのか」という問いに対する回答であり、分類は筆者による。なかでも特殊な例は、第7夫人の娘の姉妹ワティとレンゴの憑依現象であろう。レンゴが94年に憑依現象を経験し、父であり長老でもあるクチョスに対して暴言を吐く。この時が、ニラがはじめて黒呪術を使った事件とされている。ワティの場合は、祖霊と悪霊の2種類が取り憑くとされている。その発言内容は、周りにいる家族に罵詈雑言を吐く、または被害者とされる人間について言及などである。憑依時の発言は、自分ではほとんど記憶にないという<sup>22</sup>。

の項からみてとれる特徴は、すべての人間が呪術医を利用している点である。最初に近代医療に向かった者(レイモンド、コソッグ、チョエ、ドベル)も、回復の兆しが無かったり再発があったりすると呪術医を利用している。また、この前者3人が他の成員と異なる点として、コソッグはホテルの従業員であり、レイモンドとチョエは前述したようにフリーランスの観光ガイドだが、他の成員から富裕と考えられていることを考慮する必要がある。というのも、近代病院の費用は一般の人間にとって高額とされており、あまり利用しない傾向があるからである。ドベルは比較的料金の安い診療所で治療を受けてはいるが、一度きりでやめている。このあたりの点は、経済的な事情のみならず、利用できる近代医療資源の質にも左右されている可能性を加味しなければならないだろう。と同時に、家長のクチョスが高名な呪術医であり、家長の跡継ぎであるサルもまた呪術医であるところから、この家族の呪術医に対する信頼性は高いと想定される。トゥヌンを利用する者は、憑依現象を経験した者(ワティ、レンゴ)のみである。ただし、必ずしも被害者本人を同行するわけではなく、トゥヌンのもとを訪れるのは母親である第7夫人ルミである<sup>23</sup>。

の項から見いだされる特徴は、呪術医 家族等の憑依 トゥヌンのパターンである。 に括弧をつけたのは、もともとワティに対するトゥヌンのお告げの中に「多く家族が病に倒れたのは黒呪術が原因である」との発言があり、表にあげた人間はその発言に自分も含まれていると考えていたからである。憑依 呪術医・トゥヌンのパターン

を持つワティの場合は、前述したように、自らに祖霊や黒呪術師達の生き霊が憑依する。初めて憑依したときから、自らの病気が黒呪術が原因となっているとすでに発言していた。憑依時の発言は、「誰々の病(事故)は私(第8夫人ニラ)がやった!」というように具体性を持ち、自分についてだけではなく、家族の病・事故に言及している。そのため、被害者とされる人の多くは、彼女の発言によって自分の身に起こった不幸の原因が、第8夫人による黒呪術であったことを認識する、という構図になっている。これに対して、トゥヌンは病の原因が黒呪術であることや黒呪術師の身体的・社会的特徴を述べるだけである。しかし、その大まかな特徴(女、家族の一員)から、家族の成員たちはごく自然に第8夫人の姿を想起し、そこに符合させるのである。ここでトゥヌンのお告げは、ワティの発言を裏付ける外部からの権威としてしか用いられていない。同様に黒呪術が存在する裏付けとして、不審事は不審な物音や異様な動物(犬、鳥)との遭遇、不吉な夢、発見された呪物などがあり、その多くは黒呪術の存在の判明後に散発的に出現する。このような不審事は、インタビューの際に語られたもののみを採取したが、他の成員達もおなじような経験をしている可能性は高いと思われる<sup>24</sup>。

以上から、個々人が利用できる対処法・説明様式の形式が看取できるだろう。第一に、黒呪術という概念によってどのような種類の不幸でもその原因を説明することが可能であるということ、第二に、黒呪術に対抗するため、呪術医に代表される文化要素が存在し、人々はある程度その規範に沿って行動する、ということである。と同時に、それらが黒呪術に対する行動・認識を彼らに強いる社会的コンテキストとして機能し、黒呪術の実在に対して、あらためて信憑性というフィードバック効果を与えている、ということがいえるだろう。

#### 4. おわりに

本章では、本事例に通底する二つの要素を指摘した。ひとつは、クチョスの家族が、黒呪術師としてみなされた第8夫人ニラを排除する方向に動くが、占い師やワティなどが「祖霊祭祀」の課題を提出することで、ニラは完全には排除されなかったことである。いまひとつは、彼らの災厄や病に対する形式化された受療行為やそれにまつわる儀礼の遂行が、彼らの黒呪術や祖霊祭祀に対する認識を強化するメカニズムになっていることである。

本論では続いて、個と集団、個と文化 / 社会、集団と社会の相互作用に留意しつつ、論を進めていく。次章において論じるのは、我々にとっては現実的な物語として信

じがたい(ある人物に責任を帰するには無理があると考えがち)黒呪術のリアリティが、個人のなかでいかにして産みだされ、社会的リアリティを獲得するかを考察したい。

---

<sup>1</sup> ただしパリでは、地域によって黒呪術師が引き起こす病を示す言葉が異なっており、統一された言葉はない。むしろパリの人々は、黒呪術が引き起こした病のさまざまな局面を参照しながら、多大な言葉を使用しているのだという[Ellen 1993]。

<sup>2</sup> ここで断っておかなければならないのは、本稿の事例は「黒呪術事件」を扱っているため、上に記したようなナチュラルスティックな病因に関する記述はほとんどでない。またこれに関連して、序章でも少し触れたが、本稿で使用する「災厄」という用語は、病だけではなく、事故や経済的問題、人間関係の不和など広い意味で用いている。パリの人々が民俗医療に持ち込む問題は、我々が考える病だけではないからである。したがって、本稿は医療人類学的視座を多く用いてはいるが、病因論に留まるものではなく、より広い概念を含んだ災厄論に位置づけられる。

<sup>3</sup> クラインマンは、治療者＝病者の相互作用に、病者本人だけでなく家族も含まれ、二者関係でない場合の方がはるかに多いことを指摘している。また、病気を患っているのは、心身の不調を訴えている本人だけにとどまらず、場合によっては病気や不調和という診断を家族全員に下し、治療も家族全員あるいは家族の中核メンバーに向けられることがあるという[クラインマン 1992]。

<sup>4</sup> 吉田はまた、多民族が住むスマトラ島北部の民俗医療において、地域に住むさまざまな人々がクロスオーバーするかたちで、最善の治療手段を求めて活発に情報を収集し、ダイナミックに移動することを示した。もちろん彼らの求める治療には「信仰」あるいは「呪術」と認識する行為が含まれているのだが、それらが成立するには、それが機能すべき病気観・世界観・霊魂観・災厄論その他が治療者とクライアントに共有されている必要がある。しかし、実際にはそのような共同性がなくとも、オルタナティブとしての民俗医療が成立するという脱機能主義的図式が明白に示されたのである[吉田 2000]。このような状況は、近年パリでも見られるようになり、非常に示唆に富む。のちに記す事例にも、いくつかイスラムの邪術が用いられることが語られる。

<sup>5</sup> このレンゴの件は、第3章で詳述する。

<sup>6</sup> 黒呪術師には生まれつきの者と、「修行」によってその能力を獲得する者とがいる。前者の場合は、自分の知らないうちに人を病気にさせていることがあるという。後の場合は、黒呪術師になるために、全部で4人の子供、とくに自分と同じ父系親族の子供を殺し、その4人の子供の霊魂をドゥルガに捧げなければならない、という反人間的イメージを持って語られる。本事例の第8夫人の場合は、後者の「修行」をした黒呪術師とされている。

<sup>7</sup> 同じく憑依時の発言を重要視されたジェロスリの事例は後述する。

<sup>8</sup> この時、叔父サルが脈診によって診断をおこなう。脈診という呪術医の診断手法は一般的で、彼らの言では、脈のリズムによってその症状を知ることができるという。治

療は、薬水(飲料水に呪術医がマントラを唱えたもの)を与え、赤タマネギを呪術医の口で噛みしだいたものを患部に吹きつけるものである。さらにシリ(siri: 噛み煙草の原料となる)の葉にマントラを刻んだものを腹部・背中の中患部に張り付けた。彼らの見立てであるプマリという病だが、かなり幅広い範囲の症状を含んでいると思われる。筆者の実見したいくつかの例をでは、主に胸部に現れた痛みが、皮膚から内臓まで通ずる症状で、時に皮膚病もプマリと診断されていることもあった。

<sup>9</sup> 参考までに、レイモンドの受けた診察と経過を記しておく。まず診断は脈診でおこなわれる。その診断により呪術医は薬をつくる。これが3種の油で、 ミニャック・プトゥック(minyak putu: 飲用)。効用は嘔吐を促す。病気の元を体の外に出す効果があるという。 ミニャック・ネタ・ワルガン(minyak netah warungan: 3滴の油滴のみずりに垂らし服用)。 ミニャック・ルフル(minyak luhur)である。

レイモンドはこの日、 を服用して嘔吐と排便を繰り返す(mencelet)。夜9時からおよそ1時間。気分は悪かったが、腰と腹部の痛みは引いた。この嘔吐と下痢が止まったあと、 を服用する。そうして彼は、ゆっくりと眠れたという。翌朝に再び、 を服用(朝・昼・晩)。その後、レイモンドは薬と病状チェックのため、再び呪術医のもとを訪れ、脈診と打診による診察を受けた。シリの葉と紙にマントラを記したものをつけたもので、紙は燃やしシリと混ぜて患部に吹きつけ治療を行った。

さらに3日後、 を受け取りにZ村へいく。脈診・打診によるチェックと、薬水(penawar: 心臓の鼓動を整える効用を持つ)を飲んだ。

<sup>10</sup> この時の呪術医の祈禱およびサンテ(sante)についての説明を若干記しておく。祈禱の方法は、レイモンドが祭壇に供物を捧げ、呪術医とともに神に祈る。呪術医はマントラを唱えながら、神に原因と治療法を尋ねる。すると、呪術医に神が憑依し、カウイ語(と呪術医は知っているが実際は不明)で話し出し、それを呪術医の妻(助手役)が翻訳して内容を伝えるという形式になっている。サンテとは、人形や紙に描いたクリス(kris: 短剣)等を突き刺すことで呪いをおこなう呪法を指す。レイモンドに対しなされたサンテでは、白い紙に人形を描き、胸の部分にレイモンドと書いてクリスを突き刺したものだそうである。

ちなみに後述するトゥヌンにも神霊が憑依し、助言をクライアントに与えている。憑依型のバリアンとの違いは、トゥカン・トゥヌンは悩みに対する助言だけで治療をおこなわないが、バリアンは治療行為も施すという点にある。

<sup>11</sup> 人々は一般に、呪術医は黒呪術師の名前までわかっているが、黒呪術をおこなった証拠がないために名前までは教えないと考えている。警察などに名誉毀損で訴えられた場合、敗訴してしまうからだという。このあたりの論理は、近代的な制度と慣習的思考がせめぎ合っていて興味深い。また、この点については2章で考察する。

<sup>12</sup> レイモンドの呪物探しの事例は、第2章で詳述する。

<sup>13</sup> この治療と呪物探しの事例は第2章で詳述する。

<sup>14</sup> バリの南部では、同じような錯乱状況でも別種のタンピア(tampias)という事例が報告されている。これは、アングイン(風)が体内に入らず身体の一部に付着し、その個所を麻痺させたり、場合によっては発狂させたりすると信じられている[吉田 1983:133]。ワティの憑依の状況は6章にて詳述する。

<sup>15</sup> 同種の占いは、吉田禎吾[1978]によっても報告されている。バリ南部のことであり、名称も異なっているが(サドゥグ:sadeg)、占いの内容はほとんどかわりがない。巫師には女性が多く、神から受ける制約が極端に厳しいとされている。巫師が語る災厄の原因は、根本的に祖霊祭祀の未遂行へと還元される。祖霊は、浄化儀礼を繰り返すことで、最後に先祖霊は祖霊神へと神上がりするが、長い間浄化されずに放置された霊は子孫を護る力が弱まり、人々は黒呪術を受けやすくなるという。

<sup>16</sup> それぞれ黒呪術による病を *peperentahan* といい、神霊による病を *kesisipan* という。

<sup>17</sup> 葬送儀礼は、*ンガベン*(ngaben: 火葬) *ングロラス*(ngeras: 祖霊が海にいる状態) *ヌントゥン*(nuntun: 祖神として陸[一族寺]に戻り、家族を守護する)の段階を経て、祖霊は浄化され、最終的に祖霊は祖霊神になるとされる。本稿では、この最終段階にあたる儀礼「ヌントゥン」を「神上がり儀礼」と呼称して使用する。

<sup>18</sup> 祖霊は大きく分けると2種類ある。まだ浄められていないものと、浄化されたものであり、後者はさらに二分される。吉田禎吾によると、埋葬までのものをピタラ(*pitara*)といい、火葬後をルルフル(*luluhur*)と呼ぶという。ピタラは下界に属し、穢れた、危険な死霊とされている。火葬後の死霊は、墓場近くのインド菩提樹あるいはガジュマロその他の木に宿るといわれる。ルルフルの後さらにマリギア(*marigia*)という浄化儀礼を行い、また別の浄化儀礼を行って、死後の魂は天界の神々の近くに達して、真の「カウイタン(*kawitan*)」(祖霊)になり、*プタラ・ヒャン・グル*(*betara hyang guru*)といわれる祖霊神になる。こうして初めて、各屋敷の社や父系親族集団の寺院に特定の日に降りてきて祀られ、供物を受けようになる[吉田 1978:99]。このX村の場合、祖霊祭祀の最終段階がヌントゥン儀礼となるのである[Wiana 1998]。

X村でも、祖霊が浄化される構図は上記と同じだが、段階に即した祖霊の名称の使用法は混乱しており、同じ村内でも一定していない。また、祖霊に対する浄化儀礼の名称も地方によって異なる場合が多い。

<sup>19</sup> バリにおいては、黒呪術は穢れとして扱われる。穢れのことをバリ語でスブル(*sebel*)といい、これをおこすものは、月経の血や性行為、出産、男女の双子の出産、近親相姦、死などである。

<sup>20</sup> 起源寺は、半ば神話的なその起源集団の祖を祀る寺である。また一族寺は、基本的に2-4世代を遡った父系共通の祖先を祀り、通過儀礼や家族儀礼などをともにする集団によって運営される寺をいう。

<sup>21</sup> このもう一方の家族と成りゆきは第5章で述べる。

<sup>22</sup> ジェロスリも前述したように憑依現象を経験しているが、彼女の場合はそれを意志的にコントロールすること、また憑依する霊が祖霊神であることから、ここでは病とみなさない。詳しくは第6章。

<sup>23</sup> レンゴが同行したのは1度、ワティは同行していない。バリでは占いに際して、必ずしも本人が直接訪問する必要はない。これは、他の民族例でも見受けられることである[クライマン 1992 他]。

<sup>24</sup> バリの人々の日常生活において、不吉なものは多く存在する。ひとつのエピソードを紹介する。筆者がレイモンド宅の軒先で家族の何人かと談笑しているとき、庭に一



---

匹の猫が入り込んできた。すると皆の会話が止まり、レイモンド夫人は飼い犬を呼び寄せ、猫を追わせた。その雰囲気には異様さと緊迫感を感じ、なぜ猫に犬をけしかけたのか問うと、「猫は黒呪術師の眷属であり、我々の話に聞き耳を立てに来たのだ」と答えた。おそらくこのようなことは、インタビューでそれを語らなかった人間にとっても日常茶飯事のことだと推測される。